

作成（2024 年度）

簡易版 TP（ティーチング・ポートフォリオ）

氏名	松永 望
所属機関名	理学部臨床生命科学科
職位	講師
在籍年	8 年

主な担当授業科目、教育の責任

【主な担当授業科目】輸血検査学，医療安全管理学，輸血移植検査学実習，免疫検査学実習，臨地実習 II，医用工学実習，生体防御学特論（大学院）

【教育の責任】基礎から最新の免疫学研究について指導するとともに臨床検査において主に「免疫」および「輸血」に関する病態や検査について指導する。また，医療安全（チーム医療，医療安全，医療組織，検体採取）および医療機器取り扱いのための基礎的な電気工学・電子工学を指導する。

教育の理念

【目標とする人物像】

- ・臨床検査医学を通じて，物事の本質や根本原理を把握すること（記憶すること＋理解すること）の大切さを知ることができる人物
- ・たとえ一人であっても，物事を自分で考えたり，調べたりして，解決・創造する努力し，自立ができる人物

教育の方法・方針

【講義】学生が講義内でしっかりと，記憶・印象に残るように講義中に使用するパワーポイントはアニメーションを用いたり，動画を流したり，実際の症例を述べたり，実際の患者画像（教科書，参考書，医学書などを参照とする）を提示したりする。講義の最後に関連する実際の国家試験問題や模擬試験問題を提示し，1 問辺り 1 分程度（計 5 問程度）学生に考えてもらい，その後解説することで，学生が講義内容をより強固に記憶・理解することができるように努める。

【実習】一人一人の学生が実験器具の取り扱いを正しく行えるように，一人一人が必ず実験器具に触り，実験結果を提示する。免疫学的・輸血学的な検査についてその測定原理を正しく理解しなければ，正しい検査結果を出すこと，異常値に対する正しい対応や考察，エラーに対する迅速な対応をすることができない。学生が測定原理を正しく理解するために，臨床検査現場で使用されているような迅速キットを用いた実習ではなく，より原始的な手法での実習を行う。また，最終日における実習では，各個人で実技試験を実施する（教科書，配布した実習書等は持ち込み可。電子機器の使用および周囲の人との相談は不可）ことで，実習したことを復習する機会をつくる。また，実技試験を実施することで学生は一人でも検査をすることができるという自信がつき，また一人であっても正しい検査をしなければならないという責任感をつけさせる。なお，実技試験は謝った検査結果が出てしまった場合，学生へ操作手順のどこがいけなかったかをフィードバックして，再度実技試験を実施し，一人でも正しい結果が出せるまで実施させる。

教育の成果

輸血検査学(2024 年度アンケート)満足 16 名, ほぼ満足 5 名, 普通 1 名, やや不満 1 名, 不満 0 名, 免疫検査学実習(2024 年度アンケート) 満足 7 名, ほぼ満足 1 名, 普通 0 名, やや不満 0 名, 不満 0 名, 輸血移植検査学実習(2024 年度アンケート)満足 2 名, ほぼ満足 1 名, 普通 0 名, やや不満 0 名, 不満 0 名だった。医療安全管理学・医用工学実習・臨地実習 II は 2024 年度において現時点(2024 年 9 月時点)では未実施。生体防御学特論(大学院)はアンケート回答者が 1 名(満足)であった。輸血移植検査学実習(2024 年度アンケート)の学生からは、「輸血移植検査学実習の最後で実技試験を実施したのは良かったと感じた。実習で班のメンバーと同時に行うと、操作を確認しながら進めることができるが、1 人で行う際の自信にはなりにくいと感じていた。特に、血液型判定では凝集の有無の判定を自分の目で確認しなければならないので、自分の手技で操作を行い、自分の目で凝集の有無を確認して判定することを実技試験を通して行えて良かった。」という声が上げられた。

今後の目標

- ・ 学生がより理解を深めるため, 学生に説明させ, より学生にアウトプットをさせる講義を目指す。
- ・ 考えさせるような症例を示して考えさせ, 発表させる (どのような疾患なのか? どのような所見が認められるか? どのような異常値がみられるのかなど)。

根拠資料

- ・ 2024 年春 2 学期学生アンケート